| | 第９回　横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録 |
|---|---|
| 議題 | （１）今後の都市デザイン行政について<br>ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて(審議) |
| 日時 | 平成 26 年９月５日（金）　午前 10 時 00 分から午前 12 時 00 分まで |
| 開催場所 | 横浜市庁舎　５階　関係機関執務室 |
| 出席者(敬称略) | 委員：西村幸夫（部会長）、佐々木葉、中津秀之、六川勝仁、国吉直行<br>書記：小山孝篤（都市整備局企画部長）、綱河功（都市整備局都市デザイン室長）<br>事務局（資料説明者）：小野田哲郎（都市整備局都市デザイン室） |
| 欠席者(敬称略) | |
| 開催形態 | 公開（傍聴者２名） |
| 決定事項 | ・「ア(仮称)横浜都市デザインビジョンについて」は、継続審議とし、審議会からの意見をふまえ作成を進める。 |
| 議　　事 | 議　事<br>（１）今後の都市デザイン行政について<br>ア　（仮称）横浜都市デザインビジョンについて（審議）<br><br>市から資料１に基づいて説明を行った。<br><br>**○西村部会長**　今年度中にまとめて、どこかで公にするのか。<br>**○綱河書記**　今年度中にとりまとめる予定。<br>**○西村部会長**　年度の後半でパブリックコメントなどの手続があるのか。<br>**○綱河書記**　市民意見募集という形になる。11 月ぐらいに市民意見募集を行い、年内１月ぐらいにはまとめという予定だったが、今は年度内にまとめる予定。<br>**○西村部会長**　後ろの章はまだこれから加筆されるということか。<br>**○綱河書記**　第４章は加筆します。<br>**○西村部会長**　第３章は文字だけになっていて、第２章は絵が多いが、スタイルは大体このような形になるのか。<br>**○綱河書記**　第３章までは今のところ大体こういう形の予定。<br>**○西村部会長**　提言からかなり変わっているが、こういうスタイルにするのがいいという議論になったのはどういう経緯か。<br>**○綱河書記**　ビジョンというからには都市像のようなものを示したほうがいいのではないかという議論があった。そこで議論したが、長期のスパンを見ていくと、１つの都市像という形で描いていくのは難しい。不確定な要素とか、いろいろと複雑な時代の中で、将来像というものは絵としては描きにくい。そこでまとめ方としては、価値観を共有するという表現にした。提言をベースには踏まえつつも、価値観を強調するのだったら、それにふさわしい言葉とか組み立てに変えるように作業した。<br>**○西村部会長**　議論するのは細かい中身というよりも、こんな大枠とこういう考え方でいいのかどうか、それから一つ一つの中身に関して、これは抜けているのではないかとかなどでよいか。今後アクションプランというのをつくるので、そちらで具体的なことに関して議論するということでよいか。<br>**○綱河書記**　こういう組み立てとかこういう価値観の打ち出し方というようなところについてご意見をいただきたい。<br>**○国吉委員**　提言では、都市デザイン活動のこれまでのような総合性みたいなものを大事にすべきだなどの内容が結構あった。それは提言としては良いが、市民向けに見せてもあまりぴんとこない。それよりも具体的にどういう都市デザイン活動によってまちがどういうふうになるのだというのが見えるようにしたほうが良い。だから提言は行政の活動に対するものになるが、ビジョンとして書くには、市民が期待するまちづくりに対応する活動とした方が良い。そういう視点では、第１章、第２章、第３章があまりうまく関係していないように感 |

じる。
　都市デザインを始めたころも、新しい時代に合ったニーズを先取りして、提案してプロデュースしていくことが都市デザインだったと思う。その価値観、その活動は今でも変わらないのではないかと思う。提言で、これまでのように総合性を発揮し、時代のニーズに合った価値観を先取りして、都市の魅力を高めていくということを言っていた。そのために総合的に各局と調整したり、抜けているところを補ったりしていた。必ずしもフォワードばかりやっているわけではなくて、受け身のサポート、ディフェンスをしながら途中から攻めに切りかえていくとか、そういうことも多分やっていた。そういう意味では、最初の第１章でいきなり守り高めるということだけを言っていて、これだけ見ると守りが前面に出てきており、今までの価値を維持することが中心になっているかなという、勘違いするような表現に見える。第２章のところは育てる、創造するという言葉で、都心臨海部ではこういうこととか、郊外部ではといろいろ出てきているが、常に守りがここで先に来ているから、何かつくるのではなくて守ることがメーンみたいな感じに見えてしまう。時代に合ったニーズを探って、それを高めるということにウエートを置いた方が良く、守りを前面に出すのは良くないのではないか。第２章のこの絵も第１章のところの言葉使いとは合っていない感じがする。第２章も、まだ足りないことがたくさんある。もっと活動とか、ハードだけではないですよと言っているところから出てくるものがもっと散りばめられて良いのではと感じる。
**○綱河書記**　日本の中で横浜は都市デザインを先駆けてずっと進めてきたという、いわゆる老舗の味のようなものをこれからの時代も受け継いでいかなければいけないと考えたため、第１章で守り高めるという言い方をしている。これは過去のいろいろなプロジェクトを室内でずっとレビューしながら、そこではどんなことを大事に取り組んできたのだろうというのを見て、それも踏まえて新しいものを加えている。言い方としては、守り高めるということだけで表現してしまっているので、伝わりにくくなっているのだと感じた。
**○国吉委員**　あと、第１章のところの冒頭に「これからの都市を考えるにあたって」とあるが、ロングスパンのこれからと、短期的なこれからと、長期的な戦略に基づく対応と、短期的な対応と、両面持つというのが感じられる表現のほうがいいと感じた。
**○西村部会長**　例えば７ページの図を見ると、「これまでの都市づくりのアプローチ」プラス「これからの都市づくりのアプローチ」ということで、今までのことを尊重した形になっているが、文章を読むと、第１章は新しいこれからのことだけが出ている感じがする。
**○中津委員**　今室長から老舗という話があったが、私は老舗のプライドこそないほうが横浜らしいなという気がする。常にパイオニアというか、常に何かをつくり上げるということで、過去にやったことはさて置きみたいなものが行間ににじみ出ているほうが、結果的には老舗ののれんを守るというか、結果的には次世代の都市デザインの全国のリーダーになっていくのではないのかという気がする。攻撃が最大の守備みたいな発想のほうが私はいいかなという気がする。
　先程の議論にもあったが、この「はじめに」をもうちょっと深く書いたほうがいいという気がする。後の各論を補完するような言葉の定義づけをもうちょっとこの「はじめに」のところでやったほうがいいと思う。具体的には、「都市「横浜」」というのが市民にとって一番誤解しやすいフレーズだと思う。Ａ３の一番初めに、富士山もあり、山もあって、雲から雨が降っているという、この絵が「都市「横浜」」なのだということをちゃんと言葉でここに入れておかないと、一番初めのページをめくった瞬間に、「都市「横浜」」というフレーズが出てきた瞬間に、このＡ３のページに行く以前に「あ、また港のことをやっているんだな」というとらえ方がされるとしたら残念だなという気がする。領域的な、都市部から郊外と言うべきかわからないが、山とか、そういうものを含めて都市の非常に重要な構成要素だという、そのエリア的な宣言が１つ。
　それと領域間のコラボレーションということが都市を考える上で最も重要なことなのだということも宣言するべきだと思う。空間だけではなくて、社会福祉とか、教育とか、土木的なことも当然だが、領域間の広がりみたいなところを含めて都市デザインだということが、今までやってきたことと変わることだというようなことを、「はじめに」のページにきっちり

| | |
|---|---|
| | と押さえた文言を入れておくことが必要という気がする。全体を通して、ここがきっちりとできていれば、後のほうは問題ないと思う。各論的にここをどうしたら、こうしたほうがいいのではないかと、細かいことはいっぱいあるが。また、ここ（「はじめに」）に何かもうちょっとわかりやすい図が欲しい。サッカーの戦略図を入れるならここにどんと入れてしまうぐらいの勇気を持ってほしい。役所内でどういう反発が出るのかはよくわからないが、こここそ勝負かなという気がする。<br>**○西村部会長**　「はじめに」をきちんとやると。それからアクションプランが後であるのだったら、それとこれとの関係みたいなものがないと。ここを読む人はこの後何があるのかわからないから、確かに全体図はもうちょっとあったほうがいいかもしれない。<br>**○佐々木委員**　私は、課題に新しくもっとチャレンジしていくというようなことを、具体的に宣言するということがあってもいいのではないのかなと思う。例えばこれだけ都市デザインを進めていくということを言っているのであれば、都市デザインという産業をちゃんと横浜につくりましょうというようなものがあって良い。市民がいろいろと頑張ってやっているというのではなくて、都市デザインで食っていける人間をもっとつくろうとか、実際にデザインするときには、「ここをレンガでやりたいよね」、「そのレンガはオーストラリアから輸入するの？」とかみたいに。もっと横浜の地域の中で、そういう素材とか職人さんとかを育てて、都市デザイン産業というのが、ハードもソフトも含めて、横浜の都心部だけではない、郊外で農業をやる人たちもある意味都市デザイン産業になるのかもしれないなどの、そういう明快な宣言みたいなものがあったりしてもいいのではないかと。<br>　例えば開発圧力が来るから、効率だけを考える開発を抑えて、そこに人間性を入れようという、そう簡単な構図で今の社会問題を解決できないというのはわかる。だが、例えば貧困だったり、自殺してしまったり、いじめで悩んでいる子たちが、健全な社会の中のコミュニティーの感覚を養えるようなところを、パブリックデザインでちゃんと解決していく、そういうところとしてオープンスペースがあるとか、パブリックスペースがあるとかということも明快に宣言してもいいのでは。そういう困っている人を助けるための都市デザインであるとか、何か目標の旗印ぐらいはあってもいいのかなという気がする。<br>**○六川委員**　私は市民委員という立場なので、そっちの観点から意見を言いたいと思う。まず、中津先生から「はじめに」をもうちょっとしっかりしたほうがいいという話があったが、横浜はこういう都市ビジョンを持って、こういう都市づくりをするのだと、もっとシンプルにわかりやすく伝える必要があるのではないのかと思う。もっと心の通った指針を示すような部分があってもいいのではないかと思う。<br>　それと、市民と共有とか、市民の都市デザインの取り組みを支えるとかとあるが、具体的に都市デザイン室がどういう役割を持って市民と接していくのだという部分はない。そこが実は市民側から見ると非常に大事な部分かなと。前回の議事録でも、「デザイン室はどこにでもかかわれるような位置づけだと思う。私の印象としては大分、昔と変わってきているように感じる。例えば馬車道のまちづくりをやった当時は、デザイン室が中心になって各局が全部連携して準備を進めていった経緯がある。しかし最近は、縦割りになりつつあって、横に入れるのでしょうが、入り方が限定されているように思う。いい意味でいえば細分化だが、やはり都市デザイン室の機能を担っている人たちが入っていかないと、結果としてよいものが出てこない」という意見を言っているのですが、そういう部分が市民をターゲットにした場合、すごく大事なので、そこの部分を表現したほうがいいと思う。ビジョンをこういう形でアシストしていくのですよ、そういうセクションは都市デザイン室が担っていきますよという部分がないといけない。確かに行政の中も再編されて、いろいろなセクションが分けられてしまったという経緯があるが、市の行政の中でも情報を共有するとか、そういう部分もすごく大事だなと思う。前回、臨海部ばかりに視点が当たっているという話をしたのですけれども、今回は郊外部にも結構視点が当たっていて、そういった意味ではよく変わっているのではないかと思う。<br>**○西村部会長**　例えば物をつくっていく、細部をこだわって、細部に力を発揮することで、全体に対して世界を見せるみたいなこともあり得る。そこにいろいろな部局を引き寄せて、 |

| | |
|---|---|
| | あるすごくクオリティーの高いものをつくらせてしまう。そういう部分もこれから先も必ず必要だし、それがなくなって何か、市民の方の感性があればそれに寄り添っていきますみたいなことだけだとよくないのではないかと思う。今までの仕事はこれまでどおりそれなりにやるし、頑張りますということが背景にあるのではないかとは思うが、新しいところばかり書いていると、少しずつ失われかけようとしているコアで持っているものをやっぱり頑張らないといけないというところが、あまり見えないのではないかと思う。７ページに、これまではこうだったけど、新しいのはこうで、両方だと言っているのだから、こういうふうに書いていることが文章でもきちんと書かれて、それなりにやることはやらないといけないと思う。そこのところをもうちょっと頭のところで表現したほうがいいのではないかと思いう。<br>　それから、サッカーの例えが私はすごく違和感がある。野球みたいにフィールドで役割があって、野球の中にサッカーのボランチみたいなものを入れるような感じではないかと思う。<br>**○国吉委員**　他都市からの横浜の都市デザイン室に対する期待感みたいなものが結構あり、最近も松本市が来て、「今年、松本市に都市デザイン担当ができました。ご指導ください。」と。（松本市は）次の一手をどう打つかという課題があるが、景観だけではなくて、都市交通、まちづくり、土地利用、都市計画と、景観も含めて総合的に取り組む都市デザインという認識である。都市デザインというのは形のところにどこかでシフトはするが、他の取組みとうまく調整しながら、人材育成を行ったり、空き家の活用をしたり、庁内の他の部局がやっているところと連動しながら都市をつくっていったりする視点があるという期待感を持って接してくれている。その辺は我々も認識しなければだめかなと感じる。<br>**○六川委員**　行政の中の組織も変わってきているので、今後の未来を見据えた都市デザイン室のあり方という部分もある。大枠の総論の部分はちゃんとチェックするけれど、各論はもう各局でやりなさいよというフローに落ちてきているのだと思う。ただ、そうなると情報が入らない。ルールだけつくって、それにのっとってやっていけばいいのだという立場に都市デザイン室がいるような気がしてしようがない。だから昔のいい部分である経験則を捨ててしまうのはもったいない。<br>**○佐々木委員**　だんだん協議型でやりづらくなってきている世の中に対して、協議というフェイス・ツー・フェイスで、人間と人間の信頼関係の中でやっていける仕事のやり方をどう再生できるか。都市デザインというのはそこに帰着してくるような気がする。どうしてもルールとか、平等性とか、アカウンタビリティーとか、そういうことに縛られてしまっていて、市民自身もそういう感覚にどんどんなってきてしまっていると思う。だからそこをもう少し小さな単位の中で自己決定して、みんなで自分の地域をどうしていくかという、小さな自治力みたいなものを都市デザイン活動を通じて再生していくというのはとても重要かなと思う。<br>　あと、７ページの「これまでの都市づくりのアプローチ」と「これからの都市づくりのアプローチ」とあるが、これまでの都市づくりのアプローチのときは、この感性のことを考えていなかったわけではない。そこでどういうふうな、それこそ馬車道を人がどう歩いていって、どんなにぎわいが生まれるかというのを、多分都市デザイン室の方もイメージを持っていた。それを実現する空間とかというものを、まだその時代はあまり人が見たことがなかったから、空間をつくるということを先に進めてきたということで、これまでの都市づくりのアプローチが空間ありきで、感性が後でという意味では多分ないのではないかと。進め方の中でどちらを先に目標像として描いていくかというときに、歩道に自然石が張ってあったりする道というのはあの時代にそれこそなかったわけだから、それをつくることによって、人々がこういうまちの雰囲気を楽しめるよという感性に訴えてきた。今はそういう手法とか空間というのはある程度メニューがそろってきているから、さらにその上でどういう感性を描くか。でもこの感性は描くのは難しい。描けるのであれば、感性像というものを描くのはいいと思うが、何かみんなで和気あいあいと楽しくやっている風景はもう既にかなり場面的にはあるではないか。でもそれではない、さらにもっと目標としなければいけない感性とはどんなものなのかというのが共有できるのか。<br>**○六川委員**　このフローはちょっと違う。感性が頭にあった。 |

| | |
|---|---|
| | **○佐々木委員**　みんなあったと。当然あったからいろいろとやっていた。<br>**○中津委員**　これまでの都市づくりからこれからの都市づくりのアプローチにスイッチするのではなくて、バトンが渡っていくようなイメージかなと思う。今言われたように、感性が後で、感性が先でというのは、どっちか何とも言えないが、ある意味、感性は人で、空間とかは空間だとすると、その結果もう一回人に戻っていくところまで踏み込むことが重要なのかなという気がする。空間が上で人が下だったのを、人が上で空間が下になったけど、その下にもう一つ、人のまちに対する愛着だったり、そういうものに戻っていくというようなものになるならば、住民発意で始まって、空間ができて、それが住民に帰っていくというようなものになるのでは。それが本当は過去のことも含めてループしていくイメージの絵がかければいいかなという気がする。<br>**○国吉委員**　どちらかというと最初は専門家の感性みたいなものや、行政の中の専門家の感性を市民にぶつけて、そのリアクションを受けながら専門家の価値も変わってきて、それが結果的にコラボレートになってきたという感じがする。それがいい結果を生んだということで、市民のこの活動をもっと活発化しましょうという感じで、市民活動をサポートするような活動がどんどん出てきた。それは一定程度進んだと思う。だから市民と行政のコラボレーションというのは当たり前の状況になっていて、それをあえて市民が上だとかと言ってすることもあまり重要ではなく、市民を上に上げても何も新たな価値は生まないのではないか。次のあり方としては、大きな社会の構造とか、そういうものを踏まえながら価値をつくってくるというような、そこに市民も加わっていかなければだめみたいな、そういう話ではないかと思う。そこだけ預けても、市民が先の価値を提案してくれるわけでもない。<br>**○六川委員**　地元と行政の信頼関係が生まれた。その信頼関係はすごく大事だと思う。だからその辺がうまく表現できるといいと思う。<br>**○西村部会長**　だから感性に関しても、いろいろな人がいろいろなことを言えて、専門家だけではなく、ただ市民だけでもないと思う。<br>**○綱河書記**　７ページの図はいろいろな意味を込めているが、どちらかというとこれまではどんどん都市のインフラなどを充足させていくという、ものづくりが先にあるようなところに、都市デザインがかかわりを持っていくというような、空間づくりが先にあったケースも多かっただろうということで、そういう表現をしている。実際、都市デザインは感性とか、そういうものを意識しないでやってきたことはないと思う。これからは、感性の側から、こんな活動、こんな暮らしがしたいねとか、そういうところからやっていかないと、物づくりとか、それ自体も起こってこないものもあろうと。必ずしも完全に時代を読み切ってこうだというふうにできているものではないが、少なくともこういう感性からのアプローチというようなところが重要になってくるだろうということで載せたものである。<br>　もう一点。六川さんからの指摘であった、都市デザイン室としての役割について、都市デザインビジョン中で言っている都市デザインは、横浜市、市役所が行う都市デザインのことである。どちらかというとアクションプランなどで、具体的な事業など、都市デザイン室が何を取り組んでいるかというところを書いていかないといけないと思っている。そこではどんな役回りで、役所の中ではこんな役回り、市民との間ではこんな仕事をするというようなところが表現されてくるかと思っている。どうしても都市デザインイコール都市デザイン室という部分もあるが、必ずしも意識の中ではそうではない。例えば今、文化観光局で創造都市とかをやっているが、そういうところをやっていくのも含めて、ここでは都市デザイン行政が担っていく都市デザインの部分だと思っている。<br>**○国吉委員**　都市としての自立みたいなものも踏まえた固有の活力とか魅力とかをつくっていくのだということについて、50年先もきちんと掲げて、それに対する短期的な対応や戦略、長期的なものをつくっていくことというのはきちんと言えると思う。郊外も含めて、トータルとしてそういうものをつくり上げていくのだということを最初にしっかりと出していくことが大事かと思う。<br>**○小山書記**　全体の構成がまだしっかりとしていないというところがいろいろと議論を呼んでいるところだと思う。西村先生が最初に言われたとおり、提言と都市デザインビジョンと |

はどういう関係か、提言のコアのところについてどのように都市デザインビジョンに盛り込むかというのが大切かと思っている。その辺もご意見をいただきたい。
　今、提案させていただいているところまでは、前回の提言の中からすると、前段の部分をかみ砕いて書いている感じになっている。そうすると、提言でいただいたときの３つの視点と、今後の展開の中での８つの提案のところの表現はまだこの中に入っていない状態にある。その辺のところはアクションプランで提示しようと思っているが、そうだとしても提言いただいたコアの部分を何も入れないのもどうなのかなというところがある。その辺もご議論いただければと思う。
**○佐々木委員**　極端に言うと、私は全然対応していなくてもいいと思う。提言ではこういうことが大事だよとぼんと言われ、都市デザイン室としてこういうことを考えたと。今度は提言を出した委員会に対して返すのではなくて、市民あるいは市全体に対してメッセージを公表するわけだから、これはここに、これはここにというのはもう要らない。多分これ１つで全部は無理だと思うので、都市「横浜」が目指していく都市デザインのビジョンはこうですと１つあればそれでいいのではないかと私は思う。「あ、このビジョンはいいよね」と思われるメッセージ性があるものをつくっていただけることを私は期待している。
**○西村部会長**　例えば風景例みたいな、そこのイメージに近いのではないか。
**○佐々木委員**　こういう形で横浜の都市デザインをこれからやっていきたいというメッセージとしてこの全体の文章や書類がまとまっていれば、それでいいのではないか。
**○西村部会長**　一方で国吉さんがおっしゃったように、50 年たっても都市として目指さなければいけないところ、それは共有できなくはないような気がする。それは、ここにも書いてあるのが、固有性を生かすとか、横浜のインテグリティーを保つみたいな意味でいうと、やらないといけないことはあるような気もする。こういうふうに１対１で対応する必要はないが。
**○佐々木委員**　それはある意味、当たり前としてどこかに書いておけばいい。
**○国吉委員**　多分みなとみらいのスカイラインにしても、赤レンガ倉庫の保存にしても、横浜はいいものがあるからいいねと言われるが、これを政策的にいろいろなところが協力してつくってきたことを、知らない人はたくさんいる。あえてそれを自慢する必要はないが、こうやって横浜はつくり上げてきたということの簡単な理解を示した上で、次の時代に向けてこういう横浜をつくるために新たな戦略を組み立てていくのだというようなことを市民に伝え、それはいいねと思われるようなメッセージを出していく。そして、いろいろなところが共同して、市民のアイデアも入れながら、いろいろなまちをつくってきたというのが出てくる。それを大事にしながら、これまでとは違ったまた新たな都市もつくっていかないとだめ。
**○佐々木委員**　このビジョンは、臨海部、都心部というところと、郊外部と、それから山と自然が残っているところが完全に相互補完関係にお互いのいいところを補い合って、全体の共同で横浜というものが持続していくというメッセージではないかという感じがする。どっちかというと、関内とか、こちらのあたりのアーバンデザイン的なところが中心だったものを、そこがつくり上げてきた価値と、一方で市街化区域の線引きをきちんとやったがゆえに残されてきた、里山とか住宅地のめりはりとか、そこでの農とか里山を生かした市民活動などの完全な補完関係を束ねていろいろな活動をつくっていって、まちとしての自立、ある意味サステナビリティーを保っていくというのがビジョンだということを明快に出してもいいのではないか。
**○西村部会長**　今まで都市デザインとしては臨海だったかもしれないけど、そこはそこで１つちゃんとした玉ができてきたので、もう少しほかの玉も補完的にやっていくという持続的な投資みたいなイメージ。
**○佐々木委員**　都市というイメージといったときに、都市と田園部、郊外部はワンセットで都市であり、いかに都市はこっちに依存して生きているという補完関係がある。
**○中津委員**　それこそが新しい定義だと思う。
**○西村部会長**　郊外の空き家に住んでこっちに通ったりする生活スタイルがあるのだということはちょっと書いてある。

| | |
|---|---|
| | **○綱河書記**　最初の「はじめに」ところにそういうものをきちんと入れていったほうがいいというお話だったかと思うので、ここはその辺の話を盛り込む。絵も入れたらというのもあったが、それは適当なものが表現できるかどうかがあるので、そこは考えてみるが、言葉としての表現は補強していきたい。<br>**○佐々木委員**　頑張ってそういう絵図を描いたらいいと思う。大正の広重と言われている吉田初三郎という人の絵が最近すごくいろいろなところで注目されている。たしか神奈川県の景観計画のリーフレットの表紙に吉田初三郎が神奈川をかいた絵が使われていると思う。あれをうまく横浜のこのビジョンを描く形にかいていって、かき込んでいるエレメントなんかを、生き生きとした人の活動が生まれるようなものにかき上げたら、それでオーケーではないかと思う。結構いろいろなところの景観計画をつくるときに絵図をつくる工夫をトライしたりしているが、非常に一目瞭然である。こういうふうにこの地域はこうつながっていて、ここにはこんな楽しさがあって、ここにはこんな魅力があって、ここをこう行くとこんなふうに人がつながっていて、川も流れていてと、それらが１枚の絵に入っている表現力はすごいので、この断面図でちょっと試みているのをもう少し本格的にやったらと思う。富士山もかいてあったり、もっと遠くのほうの東京のこっちのほうにはスカイツリーが見えたり、当然そういうかき方はできる。ぜひ参考にしていただきたい。<br>**○綱河書記**　今第２章のところに絵はあるが、これそのものはまだ下書きのような絵である。イラストそのもののクオリティーは最終的には上げるが、かき込みの密度とかをどんどん上げていくとかなり具体的な絵姿になっていくので、かき込んでいる要素は今下書きにあるものプラスアルファぐらいかなと考えている。我々はそういうイメージでこの断面図のところは考えているが、「いやいや、もっとリアルにいろいろと見えるような絵にしていったほうがいい」とか、そういうご意見はあるか。<br>**○西村部会長**　確かに吉田初三郎的なものがかけるのであれば、それはイメージを喚起するのでいいと思うが、それはそれで吉田初三郎ぐらいの才能がないとなかなか感動させるものはできないのではないか。<br>**○佐々木委員**　頑張れば、結構いけると思う。<br>**○中津委員**　リアルというよりはイメージしやすいということ。それはリアルとはちょっと違うと思う。<br>**○西村部会長**　確かに市民向けということであれば、そこがメッセージとしてはすごく強くなるかもしれない。<br>**○六川委員**　これは 50 年先というイメージが１つあるが、今までやってきた継続性みたいなこともちょっと表現したらいいなと思う。例えば具体的に言うと、デザイン室は歴史的建造物を保存していこうということでずっと活動しているが、これはこれからも続く。何となくそれはもう事業として終わってしまったような感じに受けとめられるが、そういうのがどんどん積み重なっていって、いいまちづくりになる。それは 50 年先の指針も見せる中でも同じことが言えるのではないか。<br>**○佐々木委員**　50 年後といったら、今建った建物が 50 年後には歴史的になっている。今歴史的とみなされていないものも、ずっと 50 年ちゃんと使い続ければ歴史をつくることができる。<br>**○六川委員**　歴史的景観保存委員会というのは、デザイン室が所管しているのか。<br>**○綱河書記**　はい。歴史の話も、今建てたというよりは、高度成長期とか、そういうころに建てたものがかなりの年数がたってきている。そういったストックをどううまく再編していくかというようなところもこれから大事な視点かと思う。<br>**○中津委員**　４ページの「2050 年ごろを目標としています」と言ってそれで項目が終わってしまっていることが何かちょっと疑問である。６大事業が大きくて、それで 50 年かかってしまった、だから次の 50 年という発想はみんな知っているが、一般市民の人はそんなことはあまり思っていない。何で 50 年だろうというのがやっぱりある。もうちょっとかみ砕いて、ロングタームとショートタームがどういうふうにかかわっていくかみたいなものこそ何か絵が欲しいし、50 年を考えるのであれば、そこからバックキャスティングしたときにどういうふ |

| | |
|---|---|
| | うにショートタームを考えていくかなど。継続的なことというのを、注釈みたいなのでもいいかもしれないが、もうちょっとここで入れておかないと。ここで「2050 年ごろを目標としています。」で次の章になってしまうと、「あ、関係ないや」と思う人がいる可能性はある。この辺もうちょっと説明が欲しいし、ここここそ何かダイアグラム的な、何が積み上がって 50 年になるかとか、50 年先から振り返って今どうするべきかみたいなものが、何か絵になっていたほうがいい。<br>**○佐々木委員**　毎日ちゃんと朝起きて、顔を洗って、ご飯を食べて、寝てという、その毎日の生活をちゃんとやっていかないといけないみたいな意味で、ずっとやっていかなければいけない都市デザインの仕事というのと、何年後にはどんとこういうことをやっていこうというのと、両方が絶対必要。<br>**○中津委員**　日常の積み重ねでそれに行くわけだから、こっちとこっちが別のものというわけでは決してないと思う。<br>**○国吉委員**　参考にこの前、国土交通省で私がプレゼンテーションした図があるので、紹介する。都市デザインの機能に新たなものが入っていって、それが分派して、地域まちづくり課とか、創造都市の活動とか、景観法絡みで景観調整課とかがあり、全体としての都市デザインという枠と都市デザイン室があり、これらが微妙に関係しているような図で、今横浜はこういう状況ですよと国土交通省で説明した。<br>**○六川委員**　話は変わるが、９ページにある、「有機」という２番目の言葉がわかりにくい。もうちょっとわかりやすい言葉はないか。<br>**○西村部会長**　この言葉は結構大事なメッセージになる。私も「有機」はちょっと違うのではないかと思った。「有機」というと自然発生的なという思いで、ここでは何かいろいろなネットワークが非常に複雑に絡み合って、単線的ではないというような意味だろう。<br>**○綱河書記**　従来だと関係性とか、そういう言葉で表現していた部分をもう少し、平面的よりはいろいろな意味合いで立体的に、今までなかったところともつながっていく、広がっていくようなイメージを何か言葉でつくれないかなということで、関係性というところをあえて今回「有機」と置きかえてみた。だが、別の意味に思えてしまったりというご指摘もいただいている。<br>**○佐々木委員**　要するにツリー構造ではなくてセミラティスといったことを言いたいわけだろう。<br>**○綱河書記**　はい。<br>**○国吉委員**　田村さんがいたころは非定型流動とか、そういう言葉を使っていた。多軸、多視点で物の価値をつくるとか、そういうことを言っていた。<br>**○中津委員**　このページが実は一番チャレンジしているページである。ほかのページは何となく「ああ、そうだよね」だけど、ここが一番言葉の投げかけとしてはすごくチャレンジだから、ほかの言葉もあわせて、ここを本当は時間をかけて議論したほうがいいかなと思う。例えば私から見るとこの「再編」という字がすごく浮いていて、ここだけ妙に何かプラクティカル、技術的である。ほかのはすごくイメージを促すような、やわらかいほわっとした表現なのに、「再編」だけすごく具体的なイメージがあって、何か別の言葉はないかなと思う。<br>**○西村部会長**　多分議論した過程を知っているとそれなりに思うのだろうが、我々はぱっと見せられるわけだから、やっぱりちょっと変だなというところがあるかもしれない。<br>**○六川委員**　一般的な言葉でいいと思う。「有機」については、さっきの説明があればよくわかる。<br>**○中津委員**　「物語」とか「親近」とか「寛容」とかに比べると、「有機」と「再編」は何かちょっと違う引き出しに入っている。また、漢字でなくてもいいのではないかという気がする。漢字にこだわっているのか。<br>**○綱河書記**　端的にアピールするようなときに同じようなのが並んだほうがいいなというのはある。<br>**○佐々木委員**　「寛容」「親近」「物語」というのと「有機」「再編」はちょっと違う。寛容とか、親近感があるとか、物語性があるというのは、獲得目標としての価値と言えるのだけれ |

| | |
|---|---|
| | ども、有機と再編というのは、それを実現するためにはこういう手法でやっていきましょうということ。寛容性に富んで、みんなにインティメートの近しい感じが起きてきて、そこで物語ができるような町をつくりましょうということを価値にしましょうと。それをやっていくためには、多様な関係性とか、今あるものの再コーディネートとか編集でやっていきましょうというふうに、そういう２段に分けてしまって説明すればちょっとわかりやすくなるような気もする。<br>**○中津委員**　順番を変えるだけで大分変わる可能性がある。前半は理念で、後半は手法みたいな。それとか漢字、漢字、漢字で、最後は平仮名とか。<br>**○佐々木委員**　当然目指すべきものの質によって選択される手法は違ってくるわけだから、とにかく効率よく経済的にやろうと思えばツリー構造でやるというように、そうでないものを獲得しようと思えば、有機的な関係性とか再編という手法が必要ということで、ワンセットだと思うので、そういうふうに説明してしまえばいいのではないか。これは最終的に直接市民が読んでわかるようなもので最初から書いていいのではないか。<br>**○綱河書記**　今の９ページのところは、このビジョンの中でも全体を通しても特に訴えたいところでもあるので、ここの表現、見せ方についてはさらに議論したいと思う。<br>**○西村部会長**　今の話だと「寛容」「親近」「物語」のあたりは皆さんかなりイメージがわくけど、「有機」と「再編」がぴんとこないと。<br>**○中津委員**　理念と手法である。<br>**○西村部会長**　手法だし、手法だとしても言葉がちょっと違うかなという感じというのは割と共通の印象のようである。<br>**○中津委員**　話が違うが、戦略的にはこれを市民の人たちによく理解してもらって、それで市民のムーブメントが起きたら、それを裏づけにまた役所の中にフィードバックされて、都市デザイン室が今後また８人以上に発展していくような、そういうようなことをちゃんとイメージしたほうがいいと思う。それと同時に都市デザインにかかわるいろいろなことを振り返ると、役所の中でこのドラフトの段階でどういうふうに他部署とのコラボレーションをするべきかというのをもうちょっと具体的にスタートしておいたほうがいいのではないのか。農政のことだったり、港湾のことだったり、「また都市デザイン室が勝手にやっている」というふうに言われてしまったらまた元の木阿弥で、これをつくることの意義は半減してしまう気がする。本当はこういうものが私たちのテーブルの上に出てくる前に、オフィシャルでないのかもしれないが、少なくともちゃんと情報を横に流して意見を聞くようなことが重要。<br>**○西村部会長**　でも常識的に考えると、自分のところの課から見ると全部消されていってしまって、都市デザイン室のところだけしか書けなくなってしまうかもしれない。<br>**○中津委員**　でも少なくともこういうものをつくっていることをドラフトの段階で何か情報が入ってくるのと、これが全部冊子になって、「市民がこんなのを持っているけど、港湾どう。」と急に港湾の人が「何これ」となるのとは全然違う。<br>**○綱河書記**　そういうわけにはいかない。<br>**○西村部会長**　今まで農政は都市デザインとは言わなかったかもしれないけど、線引きを頑張ってきたということは、大きな意味でいえば都市デザインを頑張っているのだという話で、頭の中でうまく位置づけてもらえるようなことをしていただけるとありがたいと思う。<br>　もう一つ、これは非常に長期だから、いわゆる長期計画よりもはるかに長期なので、どういうふうに市の中で位置づけるかというのがある。多分法定計画のほうにもこういうものがリファーされていったりすることによって、これがあまり棚に置かれないようなものにするというような工夫も必要な気がする。<br>**○国吉委員**　オーソライズすればそれがまた進むかというと、必ずしもそうでない。昔の手法だと、こういうのをもとにアクションプランみたいなものを幾つか仕込むわけだが、その中で１つか２つ各局の協力を得て実現したものができてくると、これはいけるねという評価も出てきて、本体が生きてくる。みんな認識しろと言ってやればそれで進むかというと、必ずしもそうでなくて、実践を経ながら理解を深めるという感じだったのではないかと思う。<br>**○中津委員**　それは今までやってきたやり方である。 |

| | |
|---|---|
| | **○佐々木委員**　それでいけなくなりつつある。<br>**○中津委員**　ここ（横浜市都市美対策審議会）に出てくる案件はみんなそうではないか。<br>**○国吉委員**　今ある動きの中で新たな実践をどうするかというところが説得力になるのではないかと私は思う。もちろん会議はやるのだけど、会議をやってもそれだけでは物は動かない。<br>**○六川委員**　今のポイントはすごく大事だと思う。特に先を見据えたという形になると、市民から見てわかりやすい都市デザイン行政でないといけない。さっきの繰り返しになるが、例えば都市デザイン室が少し今機能分担しているデメリット、メリットとはちょっとあるとは思う。<br>**○綱河書記**　我々のところは人数的にはずっとこんな程度のところだが、例えば歴史の関係でいけば横浜ヘリテイジみたいなところのように市の外側にも一緒に取り組んで政策を実現していけるところも出てきている。そういうものが今後どんどんふえてくる、そういうところも含めて都市デザインを進めていくというような体制については、４章のところで触れていきたい。<br>**○綱河書記**　いろいろと意見をいただいているが、そのいただいた意見をもとにもう一度修正をかけて、またご審議いただくという形になる。<br><br>（２）その他<br><br>**○綱河書記**　本日の議事録は、横浜市の保有する情報の公開に関する条例に基づいて、議事録は公開することになっている。部会長の確認を経て、閲覧に供させていただく。<br><br>閉　会 |
| 資　　料 | 資料１：（仮称）横浜都市デザインビジョンについて<br>資料２：第８回横浜市都市美対策審議会政策検討部会議事録 |
| 特記事項 | ・本日の議事録については、部会長が確認する。<br>・次回の開催は 10 月 30 日とする。 |